

紅屋の娘 (十卷)

帝キネ 時代映畫

原作並脚色者

小瀧すゝ子

監督者

松本英一

撮影者

鍋本榮一郎

主演者

久野あかね

紹介者

第百三十六號

純情とセンチメントを勘違ひしてゐるはしないかと思はれる程、念入りに管絃な内容を引延して描いてゐる。小唄に對する觀衆の魅力が幾分、劇的進展の冗長さを感ぜしめないにしても最早、現在に於ては斯くも感ぜしめないにしてもな盛つたものは飽食してゐるはしないか。紅屋の賑を纏る二人の男が、性格的に鮮明さを缺いてゐるし、女主人公たるまり子にしても、何等迫真的な熱情を感ぜしめない。單にシナリオによつて動いてゐるのであつて、内在的な力がない。即ちシナリオや監督は相當な纏りをつけてゐるに係らず、「ほんさうのもの」を纏んでゐない點に、一分の隙があり、冗長さが感ぜられる。且つ主演者久野あかねは此の役柄には不適當であり且つ重荷である。松本泰輔のワキ役は流石に光り、藤間林太郎も無難、近松英二即は未だ未完成で幾分演出に躊躇の跡が見へて不安だ。多くの人物を點綴させて相當の纏りをつけてゐる處に松本監督の手續を賞すべきか。

(寫真版紹介號) 水町 青磁
興行價值 時流的にナンパワン映畫であるが、小唄の廢滅と共に其の價值も半減されるに違ひない。十卷の長尺が少し持餘し氣味だ。
(七月三日 大阪芦邊劇場、神戸相生座)